

ランキングで見る日本の実力

跡見学園女子大学マネジメント学部教授 山澤 成康

今年もサッカー・ワールドカップは盛り上がった。日本チームは1次リーグを突破できず残念だったが、事前のランキングをみると、無理からぬ点もある。

試合直前のFIFAランキングは46位。グループC内の順位は、コロンビア、ギリシャ、コートジボアール、日本の順である。ワールドカップ出場チームが32チーム、決勝トーナメントに進むチームが16チームなので、ランキング通りならワールドカップに出られただけでも良かったということになる。

「ランキングは本来の実力を表しているのか」というのは古くて新しい問題だ。1998年、日本がワールドカップに初出場した時、ランキングは12位だった。日本の実力は当時より現在の方が上というのが大方の見方だろう。その意味では、当時の高いランキングには違和感がある。

1998年当時ランキングが高かったのは、勝ち点を足し上げるだけのポイント制だったためだ。日本はアジアでは相対的に強かったため、勝ち点は多く取れた。一方、強豪ひしめくヨーロッパでは、実力があっても戦えばどちらかは敗者となる。そこで現在は、試合の重要度、対戦相手の強さ、対戦相手が所属する大陸なども考慮して計算されるようになった。実態に近づける努力をした結果が現在のランキングである。

もう一つサッカーのランキングで有名なのは、World Football Elo Ratings（イロ・レーティング）で、日本の順位は24位だ。数学者イロが考案したもので、こちらの方が実感に近いという見方もある。基本的には過去のすべての試合を評価して順位が決まる。

イロ・レーティングは便利な使い方がある。平均的なチームは得点が1,500点に基準化されており、得点差が200点ある場合、強い方の勝

率が約76%になるように作られている。ここから計算される1次リーグでの日本の予想勝率は、対コートジボアール戦46%、ギリシャ戦44%、コロンビア戦30%でもともと厳しかった。

経済統計のランキングで最近話題になったのは、2011年にインドが日本を抜いてGDP世界第3位となったというニュースだ。日本は1968年以降42年間、米国に次ぎGDPの規模第2位の座を占めていた。しかし、2010年に急成長を続ける中国に抜かれ第3位に転落した。さらに、インドに抜かれたということだ。

しかし、これは購買力平価換算の順位で、ドル換算で見ると2011年の日本のGDPは5兆9,000億ドルで依然第3位だ。インドのGDPは1兆9,000億ドルで日本の3分の1に過ぎない。第4位に転落したのは、あくまでも購買力平価という基準を当てはめた場合である。

ではどちらの指標がふさわしいのか。購買力平価とは、各国の物価水準を考慮した為替レートのことだ。購買力平価での比較は、各国が「自国でどのくらいの量の買い物ができるか」を表している。一方、ドル換算での比較は「米国でどのくらいの量の買い物ができるか」を表している。物価の安い新興国では自国で買える量が増えるため、購買力平価換算のGDPは先進国に比べて増加する。国の豊かさを考える場合は、購買力平価で考えることが適当な場合もあるが、国際的な経済の規模という意味では、通常のドルベースで考える方が適当だろう。

だからといって、日本が安泰というわけではない。インドは人口増加率、成長率ともに高いため、ドルベースでも差はどんどん縮まっていく。購買力平価で4位転落というニュースは、早目の警戒信号ととらえた方がよい。